高崎経済大学論集　第48巻　第３号　2006　47頁～59頁

明治大正期に於ける富山県宇奈月温泉の研究（1）

――温泉関連史料及び新聞史料の検討を中心に――

富　澤　一　弘・若　林　秀　行

Study on Modern Unazuki Onsen（1）

Kazuhiro TOMIZAWA・Hideyuki WAKABAYASHI

Summary

Unazuki Onsen is currently the biggest hot spring resort in Toyama prefecture.

Unazuki Onsen is located as the gateway to Kurobe Canyon, which boasts Japan's premier glorious view, and is the earliest hot spring resort having been developed in Toyama prefecture with a major investment.

Unazuki Onsen is a relatively new hot spring resort and the opening was in year 13 of the Taisho Era (1924). Before then, many hot springs were scattered in Kurobe Canyon and they were doing small business. However, all of them were so hard to access that only the neighborhood residents used them.

There were many plans to pipe hot spring water from the sources in the canyon to villages downstream and to run hot spring hotels there. However, all the plans ended up in failure due to financial and technical obstacles.

Those obstacles were solved by the development of power resources in the Kurobe river accompanied by development of tourism in Kurobe Canyon and of Unazuki Onsen with a lot of capital invested by Toyo Aluminium Corp. and Japan Electric Power Corp.

The purpose of this article is to look at the history of Unazuki Onsen from beginning of the Meiji Era when small hot spring spots were scattered in Kurobe canyon to beginning of the Showa Era when Unazuki Onsen was opened and the spa business began to take firm root by reviewing newspaper articles and historical data of relevant companies.

はじめに

明治維新を経て近代に入ると、富国強兵政策・殖産興業政策の下、工業が発展し、都市が成長して中産階級が生まれ、温泉もこうした社会・経済情勢を反映して、従来の湯治場（療養温泉地）としての機能だけではなく、保養の場、更に大都市に近接した温泉では慰安の場ともなっている(註１)。

富山県内に於いても、日清戦争による好景気の下で、明治28年・29年以降に資金力を持った温泉経営者によって温泉への通路の改善や、施設の改良、サービスの向上などが行われ、温泉はそれまでの湯治場としての機能だけではなく、避暑などの目的でも利用されるようになっている。

昭和初期になると、昭和６年にわが国最初の国立公園として瀬戸内海、雲仙、霧島が指定されるなど、自然景観地域の観光的利用に目が向けられた。交通の面でも、省線（国鉄）が全国的に充実し、また私鉄が観光を目的とした鉄道線を敷設し、大都市とその周辺の温泉地を直結させた。鉄道網の整備により観光市場と温泉地への所要時間が大幅に短縮されると、浴客が増加するとともに客層も変化している(註２)。

本論で扱う宇奈月温泉（現富山県下新川郡宇奈月町）が開発されたのは、まさにこうした時代であった。

宇奈月温泉は、日本有数の絶景を誇る黒部峡谷の入り口に位置し、富山県で最も早く大規模な資本を投入して開発された温泉である。

宇奈月温泉自体の歴史は比較的新しく、その開湯は大正13年のことであるが、黒部峡谷内部には、無数の温泉が散在しており、近世以来それぞれが小規模な営業を行っていたが、何れも交通状況は極めて不便であり、温泉周辺地域の人々のみに利用されているのみであった。

こうした状況を改善するために、峡谷内の温泉源から下流の村まで引湯を行い、そこで温泉を経営する計画は何度か立てられたものの、資金的・技術的な問題のためにいずれも挫折している。

大正４年、黒部峡谷内で営業していた小温泉のひとつである二見温泉を黒部川の下流、愛本という土地に引湯する計画が立てられた。この計画に基づいて、大正５年に設立されたのが、愛本温泉株式会社である。愛本温泉は、大正６年６月より営業を開始しているが、様々な要因から、数年で営業休止を余儀なくされている。

その後、この愛本温泉を母体にして、東洋アルミニウム会社、そしてそれを引き継いだ日本電力株式会社による多額の資金を投入しての、黒部川の電源開発と黒部峡谷の観光開発が行われ、その一大拠点となったのが、宇奈月温泉である。

本論文は、明治時代初頭の黒部峡谷内に小規模な温泉が散在していた時期から、宇奈月温泉が開湯しその経営が軌道に乗る昭和初年までの宇奈月温泉を、新聞史料・会社関連史料から検討することを目的としている。

第１章　黒部峡谷の温泉

黒部峡谷は北アルプスを東西に二分する日本第一のＶ字谷で、黒部川によって形成され、一般には宇奈月温泉から上流のことを指している。渓谷は一大温泉地で、随所から温泉が湧出し黒薙温泉（くろなぎおんせん）、鐘釣温泉（かねつりおんせん）等が比較的有名であった[註３]。

明治42年に編纂された『下新川史稿』によれば、黒薙温泉は黒部川の支流である黒薙川の右岸に位置しており、温泉の起源は正保２年まで遡ることが出来る。音沢村（現上新川郡上市町）の住民太郎左衛門により発見されたものの、道路が険阻であることから人々の来浴には適さなかったので、嘉永元年３月に音沢村までの引湯が検討され、藩主から命が下ったが、工事費が多額に上ったことから完成には至らなかった。

黒薙温泉へ行くには音沢村から黒部川の右岸の山路を通行しなければならないが、途中に険阻な場所があり、道の下は直に黒部川の激流なので落下の危険があり、また通路の所々に渓谷があり吊橋が架かっているなど、入浴客の往来は容易ではなかった。しかし明治37年に黒部官山の林道が開削されてからは、愛本村から内山村を通って宇奈月谷・佛石を経て五味平に至り、温泉へ至る通路が完成している[註４]。

また鐘釣温泉（現下新川郡宇奈月町）は、黒部峡谷のサンナビキ山、百貫山の間の谷の河原に湧出する温泉で黒部川の左岸に位置していた。文政７年に栃山村の孫右衛門らが開湯したとされている。黒部奥山は険阻なために片貝川の谷筋から東又谷をさかのぼり、サンナビキ山を越えて温泉へ入浴した。入浴可能であった期間は５月から９月までで、山道を５里も歩くことから５年後には閉湯している。その後、慶応３年から温泉再興の動きが起こり、同４年島尻村の刑部により温泉は再開されている。その後、明治11年に富山市の大間正助の手に渡っているということである[註５]。

ここでは、上記の２つの温泉地の新聞記事を中心にして明治期の黒部峡谷の温泉地に関する検討を行う。

史料１

鐘釣温泉廣告

鐘釣温泉ハ例年之通七月一日ヨリ開湯ス乞フ御愛顧ノ諸君陸続御来浴アランコトヲ

婦負郡富山愛宕町　右湯元　大間知（ママ）正助

（「中越新聞」　明治21年７月３日４面）

この史料は鐘釣温泉の広告で、鐘釣温泉は例年７月１日より開湯しており、湯元は明治11年に温泉の権利を受け継いだ婦負郡富山愛宕町（現富山市）の大間知正助（大間正助）であったことが分かる。また明治23年には黒薙温泉の記事が初めて新聞紙上に掲載されているが、このように記事の

掲載回数が少ないのは、黒部峡谷の温泉地は険阻な場所にあり利用者は周辺地域の住民が殆どであり、その規模もそれ程大きなものではなく、また本論で利用した新聞は富山市を中心とした地域の住民を対象にして発行されていたことによるものだと考えられる。また黒薙温泉、鐘釣温泉以外のこれより規模の小さい温泉地の記事は単独では掲載されていない。

史料２

黒薙温泉営業快復(マヽ)廣告

黒薙温泉営業快復

但快復ハ本年五月二十一日ニシテ開湯ハ六月二十一日ナリ

附テ来明治二十四年ヨリ四月一日開湯十一月三十日休湯

此温泉ハ抜群名湯ニシテ飲食ニ用諸病ニヨシ

此个所ハ富山県越中国下新川郡舟見村外六个村入会接続黒部奥山官林内ナル可シ

此里程魚津町ヨリ温泉場へ八里泊町ヨリ間六里

右本年ハ道筋並湯小屋改良仕候間賑々敷御入湯アランコトヲ謹啓候ナリ

明治二十三年八月十日

湯基魚津町　河上伯義

愛顧諸君

（「北陸公論」　明治23年８月12日４面）

この史料は黒薙温泉の営業回復広告である。近世の鐘釣温泉は５月から９月まで入浴可能であったということであるが、黒薙温泉は明治24年から４月１日に開湯し11月30日に休湯する予定であったことが分かる。また温泉地は、魚津町から８里、泊町から６里の黒部峡谷内にあり、道路を改修したと広告にはあるものの、容易に行くことが出来る場所ではなかったものと推測される。

史料３

河上伯義てふ人の所有に係る下新川郡黒薙温泉と云へるは黒部川上流の山林中に湧き出で国道線より三里許り隔たりたる處なり其の温度は粥を熟せしむる程にて何となく全気を帯び諸病の治療にと入浴せし人の折々其効のありしゆゑ奥深き山里も時ならぬ賑わひを為すが今ハ昔し旧藩時代の其の折ハ御取締山となん唱へ厳しき制禁のありしかど明治維新の後に至り伯義氏の先老伯雅と云へるが温泉開業を出願したるも其の志を齎らして没せしより今の伯義氏が遺志を継ぎたしと何か宮内省へ直願に及びしとて裁判沙汰にまで成りしも其後種々の手続を経て今日に至りしものなりと態々の通信

（「北陸公論」　明治23年９月12日３面）

これは、史料２の「黒薙温泉快復廣告」が掲載された１箇月後の９月12日の「北陸公論」に掲載された黒薙温泉の紹介記事である。これに依れば黒薙温泉は黒部川上流の官林内に湧出し、国道線から３里ほど離れた場所にあり、その温度はかなり高く粥を熟させる程(註６)であり、諸病に効能があった。この温泉は藩政時代には信州との藩境である黒部奥山の御取締山の内にあったことから、そこへ入浴することは加賀藩に禁止されており、明治維新後、現経営者河上伯義の先代河上伯雅が温泉開湯を出願したが志半ばで没し、河上伯義がその遺志を継いで宮内省へ直接出願し裁判沙汰にもなったが、その後様々な手続きを経て今日に至ったということである。

史料２には営業回復とあるが、それが冬期休業期間から営業を再開したのか、それとも上記の記事中にある様々の手続きを経て近世以来の温泉営業を再開したことを意味しているのかは不明であるが、ここで改めて黒薙温泉の歴史に関して触れているところを見ると、少なくとも前年からの冬期休業期間から営業を再開したのではなく、数年間は営業を行っていなかったものと推測される。

史料４

西鐘釣温泉廣告

本温泉儀ハ是迄各位諸君ノ御愛顧ニ依リ日ニ月ニ繁昌ニ趣キ候ヘ共尚道路険悪ノ嫌ヒアルニ付キ今般愛本橋ヲ渡リ音澤村ヲ経夫レヨリ黒部河岸ニ沿ヘ一道路ヲ開鑿仕候ヘバ大ニ道ノ便宜ヲ得シノミナラズ浴室モ客間モ大普請ヲ加ヘ殊ニ入浴ノ期節モ夏ハ五月ヨリ冬ハ十一月迄ニ相延ハシ万事親切ニ取扱ヒ申候間何卒旧ニ倍シ陸続御来浴ノ程偏ニ御願申上候

八月　　上新川郡西鐘釣温泉主人

(「北陸政論」明治24年８月12日４面)

この西鐘釣温泉という名称は、鐘釣温泉が西鐘釣山の麓にあることに起因した別名であり、本論では現在の呼び名である鐘釣温泉で統一することとする。

何度も触れてきたとおり温泉地にとって通行しやすい道路を建設することは重要なことであったが、中でも黒部峡谷内にある鐘釣温泉や黒薙温泉にとっての経営上の最大の不安材料は温泉へ通じる通路が極めて険阻な山道であったことであり、実際に近世にはこれが原因で鐘釣温泉は閉鎖に追い込まれており、通路の問題を解決することが温泉の繁栄の為に必要不可欠な条件であった。

上記の広告ではこうした問題を解決するために黒部川河岸に通路を開削し、入浴客の便宜を図ることが記されている。『下新川史稿』には「明治二十年頃に至り、音澤村より黒部川に沿い通行する路開けし」とあり、この新道のことであると思われる(註７)。また広告中に温泉の入浴期間を５月から11月に拡大する旨が広告されており、これは同じく峡谷内部にあった黒薙温泉の経営期間に合わせたものと推測される。

その後、明治25年、26年の新聞紙上にこれらの温泉地の記事は掲載されていない。

史料５

　黒薙飲料温泉廣告

○道幅六尺ニ本年改修ス

○湯賃一等金拾銭　二等八銭五厘　三等七銭

　但小屋道具油薪料含

○効能胃肺癇癪僂痲窒質子宮其他万病ニ宣シ

○本年ヨリ十ヶ間ニ幅十尺ノ車道開拓

黒薙湯元　河上伯義

（「北陸政論」　明治27年８月２日４面）

これは明治27年４月の黒薙温泉広告である。「黒薙飲料鉱泉広告」という表題からも分かるように、同年の黒薙温泉は飲料可能であることを宣伝している。またこの年に幅６尺の温泉へ通じる通路を開削する予定であり、更に同年から10年の月日をかけてその通路を幅10尺の人力車も通行可能な道路に改修する予定であったようである。

この道路の改修にあわせて黒薙温泉は様々な活動を行っている。

史料６

下新川郡黒薙温泉主河上伯義氏は貧民に同温泉施浴の方法を設け甲は施浴乙は施浴施食夫れより丙丁に至り施浴施食の上往復の旅費まで与ふるの趣向なるが此程射水郡（中略）の四名は各三十日中の施浴を受け何れも病気全快せしとて河上氏へ懇切なる謝状を送りたるよし

（「北陸政論」　明治27年９月９日３面）

この記事によると、黒薙温泉湯主河上伯義は、貧民に甲乙丙丁の無料入浴の等級を設定し、甲は無料で入浴、乙はそれに食料、丙丁は更に温泉場までの往復の旅費を与えるという社会奉仕を行っていたことがわかる。

記事によれば河上伯義は恐らく丙丁の等級になると思われる射水郡の貧民４名に各30日の長期間の施浴を与え、彼らの病気は全快したということであり、温泉の効能を宣伝する目的もあったものと推測される。

史料７

　道路開鑿廣告

世に黒薙温泉の霊妙神秘にして発症難症に寄効（ママ）ある全国温泉中亦た其の比を見す然れ共是迄道路険悪遠く山間幽谷中に埋没したれば世に其奇効（ママ）を知る者殆ど少なきは実に千古の遺憾と云ふべし而るに今や三千有余の金費を抛ち一条の道路を通じたれば（中略）四方の諸君来つて一浴を試み

給へ（中略）

下新川郡黒薙飲料温泉主　創業者　河上伯義

（「北陸政論」　明治27年９月29日４面）

この広告は、８月の段階で黒薙温泉主河上伯義が出した広告中にあった幅６尺の温泉道が完成したことを人々に知らせるものである。記事に依れば道路の改修に投じた資金は3,000円以上に及び、これにより高い効能があるとされていたものの、黒部峡谷の険しい山中にあり交通困難であったことから、あまり人々に知られてはいなかった黒薙温泉へ容易に行くことが可能となったとある。この通路の完成で黒薙温泉への交通は格段に良くなったことは事実であり、記事だけを読めば、更にその後10年の月日をかけて温泉への通路を更に拡張し、人力車の通行が可能となればそれまでの黒薙温泉の主要な客層であったと考えられる周辺地域の人々以外による温泉利用も増加したのではないかとも考えられる。

しかし、この後数年間黒薙温泉を始めとした黒部峡谷の温泉地に関連した情報は、一切地元新聞紙上に掲載されていない。明治30年代には、小川温泉（現富山県下新川郡朝日町）、山田温泉（現富山県富山市）などの黒部峡谷内諸温泉より交通の便の良い温泉地が、様々なサービスを行うようになり、またより都市部に近接した海浜部に於いて海水浴が盛んに行われるようになっている。こうした中で、都市住民を含む多くの人々は、若干交通の便が良くなったに過ぎない、黒部峡谷内諸温泉よりも、交通の便のよいこうした場所を避暑地などに利用するようになり、新聞もまた、山田・小川温泉や海水浴場の情報に、その紙面を割くようになったことによるものであると考えられる。

史料８

黒薙温泉廣告

當温泉ハ浴客諸彦ノ御愛顧ニヨリ逐日隆盛赴キ候段感謝ニ不堪候依テ本年ヨリ一層御愛顧ニ酬ヘンガ為メ道路修繕シ浴場客室等清潔ヲ旨トシ万事丁寧ニ御取扱申上候間旧倍ノ御愛顧ヲ以テ陸続御来湯之程偏ニ奉懇願候

明治三十五年六月十八日

黒薙温泉主　佐々木次郎四郎

（「北陸政論」　明治35年６月19日４面）

次に黒薙温泉に関連した情報が新聞紙上に掲載されたのは明治35年のことであった。更に黒薙温泉の湯元は河上伯義ではなく、前述の『下新川史稿』にあるように佐々木次郎四郎に交代していることが分かる。明治27年から35年までの８年の間にどのような出来事があってこの様な温泉主の交代が行われたのかは新聞に記事が掲載されておらず詳細は不明であるが、黒薙温泉が険しい山中に

あり交通が困難であり、また明治30年代にはより交通の便がよく施設も整備された温泉地が各地に出現しており、黒薙温泉が入浴客を奪われていた可能性が高いものと思われる。

その後明治37年に、黒部官山の林道が開削されてからは、愛本村から内山村を通って黒薙温泉へ至る通路が完成し、より交通の便が良くなっている(註８)。しかしながら、黒薙温泉に入浴するためには険しい山道を通行しなければならないという状況が変化したわけではなかった。

［註釈］

註１　『新観光地理学』（山村順次　原書房　平成16年２月）92～95頁を参照。
註２　『観光地理学』（浅香幸雄，山村順次　昭和49年９月）87～92頁を参照。
註３　『日本歴史地名大系16　富山県の地名』（平凡社　平成６年７月）50頁。
註４　『下新川史稿　上巻』（下新川郡役所　明治41年／再版　新興出版社　昭和59年）107～108頁。
註５　『日本歴史地名大系16　富山県の地名』（平凡社　平成６年７月）164頁。
註６　『日本歴史地名大系16　富山県の地名』（平凡社　平成６年７月）144頁「黒薙川」の項目によれば温度は97℃程度。
註７　『下新川史稿　上巻』（下新川郡役所　明治41年／再版　新興出版社　昭和59年）112頁。
註８　『下新川史稿　上巻』（下新川郡役所　明治41年／再版　新興出版社　昭和59年）108頁。

第２章　二見温泉の引湯

黒薙温泉をはじめとした黒部峡谷内の温泉は富山県内では比較的有名ではあったものの、何れも交通が困難な場所にあり、多くの人々によって利用されることは難しかった。こうしたことから計画されたのが愛本温泉であり、そして愛本温泉の母体となったのが、二見温泉であった。

史料９

二、二見温泉

黒薙川の右岸、三左衛門谷にあり。黒薙温泉より上流五町にして達する。泉源二あり、一は温泉場より十余町の上流、二見岩附近に湧出するものにして、之を二見の湯と云ふ。岩壁の間樋によりて遠く之を導く。一は温泉場より下流、二三町の対岸に湧出するもので、之を黒薙の湯と云ふ。（中略）本温泉は十余年前より、本郡下立村の草野武平氏の経営に係る。（中略）偶明治四十五年の大洪水の為め流失の不幸に遭ひ、其後更に辛苦経営の上今の地を下し、再び同氏の経営を見るに至ったのである。

（『黒部渓谷』25頁）

この史料は大正11年に刊行された冠松次郎による黒部峡谷の観光案内書である『黒部渓谷』の二見温泉に関する部分である。これによれば二見温泉は10数年前(註９)より草野武平により営業されており、２種類の泉源がそれぞれ二見の湯、黒薙の湯と呼ばれていたことが分かる。

大正４年、二見温泉は組織を株式会社とし、温泉を下流に引湯することを計画している。

史料10

●二見温泉の独特

下新川郡二見温泉は泉源五ヶ所の湧出口を所有し殊に泉質二重なると設備の完全なるとにより世に好評を博しつゝあるが尚地方の発展策として株式会社と為し高温なる黒薙湯及二見の湯を分湯して愛本橋附近へ引湯するの大計画なるが一昼夜の湧量（両泉）三千五百石以上に達し温度は華氏二百〇六度、摂氏九十五度なるを以て三里余の遠距離を引湯するも充分保温するは確実なり而して温泉二種の特効と日本三奇橋の一たる愛本橋の風光とを利用するが故に開湯の暁には他に比類なき温泉場とならん（後略）

（「北陸政報」　大正４年４月15日３面）

この史料は「北陸政報」に掲載された新聞史料であるが、これによれば二見温泉は２種類の泉質の温泉に入浴することができ、また設備が完備されていることから好評を博しており、また一昼夜の湯の湧出量は3,500石以上に達し、また湯温も高温であるため３里下流まで引湯しても温度が低下しないことは確実であると考えられるため、地方の発展策として組織を株式会社化し、愛本橋附近において開業する計画であったことが分かる。

先述の通り、黒部川流域には黒薙、鐘釣を始めとして多数の温泉があるが、日本有数の渓谷中にあることから交通が極めて困難であったため、入浴する者は少数に留まっていた。二見温泉の引湯計画はこうした交通の問題の解決策のひとつであったものと考えられる。

史料11

●二見温泉の引湯

下新川郡二見温泉株式会社取締役福井重斯、草野武平、八木孝太、田中太郎左衛門、川原久作、監査役此川與市、光岡傳四郎、大島茂、株主戸田勝茂、松本茂亮、松木兵次郎、田内淺二郎の諸氏は去る廿四日愛本橋東詰草野支店橋見館事務所に集合し午前十時黒部川沿岸の道すから山水の風光を眺めつゝ午後二時温泉場に達し一浴酒宴を催し翌廿五日現場及ひ五ヶ所の泉源を調査したるに何れも予定以上の温泉湧出するを確認し三里以上引湯するも尚保温充分なるを認め技術家の測量に着手するの決議を為したり期年ならさる間に日本三奇橋の一たる愛本橋の絶景と相待て全国有数の温泉場となるへし

（「北陸政報」　大正４年４月30日３面）

この史料によれば二見温泉株式会社の取締役福井重斯等は４月24日に二見温泉の５箇所の泉源を視察し、温泉の湧出量や温度を確認し、予定通り３里下流の愛本橋附近まで温泉を引湯して開業することを決定している。こうして二見温泉引湯計画は正式に実施されることとなった。

史料12

●二見温泉引湯

測量の進捗

二見温泉測量は既報の如く見田工学士に嘱託しありしに五月三十日を以て外業測量を結了したり其の測量の設計、地図等全部は七月二十日迄に調整済となるにより本月二日愛本橋爪事務所に於て引湯工事施行方法に対し重役会を開きたるに第三湯の泉源より掘削工事に着手するに決定せり而して工事の起工は本月八日にして外業測量の成績に徴すれば引湯工事の実行容易なる加之ならず永久完全無比の工事となるを以て数年待たざる間に天下の絶景と称へらるゝ愛本橋附近へ引湯するに足るべし而して工事竣功の暁は泉質二種の特効と風光の明媚なると相待て愛本温泉の名称も全国に喧伝せらるゝは近き将来なるべし因に當温泉は泉質二種なる特殊と設備の完整せるとに依り世に好評を博しつゝあるが故目下浴客多数にして日々増加し大に繁昌を極め居れりと云ふ

（「北陸政報」　大正４年６月７日３面）

史料によれば、二見温泉引湯のための測量は、見田工学士の手によって実施され、５月30日までに外業測量を完了し、６月２日に愛本橋詰事務所に於いて重役会が開かれ、５つある泉源の内の第３の泉源より掘削工事を行うことが決せられ、この記事が掲載された翌日である６月８日より工事が起工されることと成っている。また「愛本温泉」という名称が登場したのはこの記事が最初である。

史料13

愛本温泉株式会社設立趣意書

緑葉親しむ可き今日此頃諸彦様には何れも恙なくあらせらるゝ事と存じます就きましては今回数ならぬ我々共は人生の幸福を求めん為と黒部奥山にある二見温泉を何様でも容易く御歩るきなりまして御入浴せらるゝ様にすれば便利でもあるし大勢の御方々が御静養なして壮健な幸福を得らるゝ様にさすれば地方の発展のみならず引いては御国の進歩にも益する事と思ひまして茲に発起となり愛本温泉株式会社を創立して前申上ました温泉を天下の絶景地たる愛本橋附近まで引湯して温泉を開湯致す考でございます。（中略）

募集要項

一目的	温泉業之ニ附随スル業務
一資本金	拾五萬圓
一公募株式	総株数六千貳百五拾株ノ内四千株ハ発起人及賛成員ニテ引受クル事
一申込期限	大正五年八月十日
一申込証拠金	壹株ニ付金貳圓
一拂込金	大正五年九月八日

右ニヨリ募集仕候間左記ノ處へ御申込被成下度申込証其他ハ同所ニ備置

下新川郡愛本橋詰

愛本温泉株式会社創立事務所

富山市袋町角十番地

電話八〇九番

愛本温泉株式会社創立事務出張所

（「北陸政報」　大正５年７月23日３面）

この史料は大正５年７月23日の「北陸政報」に掲載された愛本温泉株式会社の設立趣意書である。これによれば愛本温泉株式会社は、交通が不便な黒部奥山にある二見温泉を誰でも容易に入浴することが出来る地へ引湯することによって、多くの人々が入浴することを可能にし、更に地方経済の発展の役に立つことを目的としており、そのために温泉を愛本橋附近まで引湯し愛本温泉株式会社を創立するとしている。資本金は15万円としているが、これは大正２年に設立された小川温泉の半分の規模であるが、当時の小川温泉は明治以来の富山県で最大規模の温泉地であり、愛本温泉は当時の富山県内に於いては大規模な部類の温泉になる計画であったことが分かる。

史料14

●愛本温泉開湯期

黒部川西岸黒薙山岳に源泉を掘削し愛本橋畔に引湯する愛本温泉の工事は先に金沢の長組に於て請負し地方人夫数百名を七組として着々工事を進めつゝあるか予定以上に進行し八月下旬までに全部竣工の見込なりと云ふ此の険阻なる山岳の掘削工事を聞き込みて見物に来たる者多くために是れを制するに多忙を極め居れりと云ふ

（「北陸政報」　大正５年７月30日３面）

この史料は愛本温泉引湯工事の進捗状況に関する新聞記事である。これによれば引湯工事は金沢の長組によって行われ、予定以上に早く進行しており８月下旬には竣工する見込みであったことが分かる。また険阻な山岳地帯で行われている大規模な工事であることから多くの見物客が訪れていたことが分かる。このように多数の人々が訪れている点や、こうして工事の進捗状況が新聞紙上に掲載されている点などからも、この愛本温泉への人々の注目の度合いが分かる。

史料15

愈々六月十五日より開湯

愛本温泉

位置　日本三奇橋ノ一越中愛本橋ヲ離ル二十五丁風光絶佳ノ地ニシテ避暑好適地ナリ

交通　三日市、泊各駅ヨリ馬車人力車ノ便アリ

効能　胃腸、カッケ、リウマチス、婦人諸病、疝癪、腺病、神経痛、皮膚病等ニ特効アリ

特殊　當温泉ハ衛生ヲ重ジ懇切ヲ旨トシ破格ノ大勉強ヲ以テ旅籠賄、自炊及鮮魚諸品等ノ賈店設備ヲナセリ

温度　當温泉ノ湧出泉源ハ黒薙ニシテ二百六度ノ高温ナリ浴場ニ於テ常ニ百十五度ノ温度ヲ保持セリ

支店　二見温泉ハ五月二十五日ヨリ開店致居候

大正六年六月　愛本温泉株式会社

（「北陸政報」　大正６年６月12日４面）

この史料は大正６年６月12日に「北陸政報」に掲載された愛本温泉の開湯広告である。愛本温泉の引湯工事は大正４年６月８日より実施されており、こうして温泉が開湯するまでに２年間かかっていることから、前述の新聞記事の工事は予想以上に速やかに進行しているという部分とは矛盾するが、険阻な黒部峡谷内の３里もの長距離を引湯するという工事はそれなりの困難を伴っていたことが推測される。

史料によれば、愛本温泉は日本三奇橋のひとつである愛本橋より25町の距離にあり、北陸線の三日市と泊の各駅より馬車・人力車の便があったことが分かる。また、愛本温泉の泉源である二見温泉も同一の経営主体の下で営業を行っており、泊町横尾の本店と、山崎村湯ノ瀬の支店という２店体制で経営を行っていた小川温泉株式会社と良く似た経営体制を取っていたことがわかる。

［註釈］

註９　『黒部渓谷』27～28頁によれば二見温泉の泉質の鑑定が行われたのは大正２年であり、同時期より営業を開始していたものと考えられる。

（とみざわ　かずひろ・本学経済学部教授／
わかばやし　ひでゆき・本学大学院地域政策研究科博士後期課程）

［付記］

本論文の後段（２）は、平成18年６月刊行の『高崎経済大学論集』第49巻第１号に嗣出の予定である。

【主要参考文献・史料】

『富山県史』通史編５　近代上（富山県　昭和56年）。
『富山県史』史料編６　近代上（富山県　昭和53年）。
『加賀市史、通史編下巻』（加賀市史編纂委員会編　昭和54年10月）。
『角川日本地名大事典16　富山県』（角川書店　昭和54年10月）。
『日本歴史地名大系16　富山県の地名』（平凡社　平成５年７月）。
『観光地理学』（浅香幸雄、山村順次　昭和49年９月）
『新観光地理学』（山村順次　原書房　平成16年２月）
『下新川史稿　上巻』（下新川郡役所　明治42年／再版　新興出版社　昭和59年）。
『温泉大鑑』（昭和８年　日本温泉協会）。
『日本温泉大鑑』（昭和16年　日本温泉協会）。

『黒部谿谷』（冠松次郎　昭和３年／『黒部峡谷史料』に収録（新興出版社　平成２年７月）。
『宇奈月温泉由来』（山田胖　昭和31年／『黒部峡谷史料』に収録（新興出版社　平成２年７月）。
「中越新聞」（明治17年１月18日～明治21年７月25日　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「北陸公論」（明治22年４月５日～明治23年９月14日　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「北陸政論」（明治23年９月18日～明治37年９月18日　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「北陸政報」（明治37年９月８日～大正７年８月　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「富山新報」（大正７年10月15日～昭和８年10月17日　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「北日本新聞」（昭和15年８月１日～　富山県立図書館所蔵マイクロフィルム）。
「東洋アルミナム会社電源開発記録」（宇奈月町友学館所蔵）。
「温泉関係資料」（宇奈月町史編さん室編　宇奈月町友学館所蔵）。
「宇奈月の温泉開発①」（宇奈月町友学館所蔵）。
「宇奈月の温泉開発②」（宇奈月町友学館所蔵）。
「昭和十六年以降申請・申告・届書其他綴」（小川温泉所蔵）。

【謝辞】

高崎経済大学附属産業研究所所長・加藤敬弘先生、様々な形で大層学恩を被りました。ここに謹んで感謝御礼申し上げますとともに、御退任後の御健康、御多幸を心より御祈念申し上げております。